『比較論理学研究』第 4 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

Vākyapadīya『〈時間〉詳解』章の研究
—*VP*3.9.1–4 を中心に—

李　宰炯(イ　ジェヒョン)

0. インドを代表する文法学者であり，言語哲学者であるバルトリハリ (Bhartṛhari) の〈時間〉論の特徴を一言で言えば，彼が〈時間〉を究極の原理である〈語ブラフマン〉が有するもっとも重要な〈能力〉として理解しているということであろう。彼は，その〈時間〉論を主著 *Vākyapadīya*(以下 *VP*) の『〈時間〉詳解』章 (kālasamuddeśa) において主題的に展開している。

『〈時間〉詳解』章は 114 の詩節から構成されている。そして他の章と同様に，そこには彼の時代の〈時間〉に関する他学派の見解も網羅的に述べられている。しかし，この『〈時間〉詳解』章は，バルトリハリ自身の〈時間〉論ではなく，「ある者達」(eke) の見解の提示に始まる，という独特の構成を示している。バルトリハリ自身の〈時間〉論が導入されるのは第 4 詩節においてである。第 1 詩節に続く第 2 詩節においては一般的に認められる〈時間〉の性質が述べられ，第 3 詩節においては，彼独自の見解ではなく，「ある者達」と自らが共有する見解が語られる。『〈時間〉詳解』章のこのような独特の構成が意味するものは何であろうか。本論文はこの疑問に対する一つの答えを提示しようとするものである。*VP*3.9.1 に言及されている「ある者達」とは誰なのか[1]，そしてこの「ある者達」の〈時間〉観がバルトリハリの〈時間〉論の中でどのように位置づけられるべきなのか，これらの疑問もまた本稿が答えるべき疑問である。

[1]後述するように，*VP* の注釈者であるヘーラーラージャ (Helārāja) によれば，この「ある者達」とはヴァイシェーシカ (Vaiśeṣika) 学徒である。

1.1. ヘーラーラージャは *VP*3.9.1 を次のように導入する。

> 「[*VP*3.6.1 においては，] 〈行為〉 (kriyā) の後に〈時間〉が挙げられている。なぜなら，その [〈時間〉] は〈行為〉の画定者 (paricchedaka) であるからである。その [〈時間〉] に関して，まず他 [の学派] の見解において定義されているその [〈時間〉] の本質を [バルトリハリは次のように] 述べる」[2]

*VP*3.6.1 において次のようにバルトリハリは，〈方位〉 (diś)，〈能成者〉 (sādhana) とともに〈行為〉，〈時間〉を〈能力〉(śakti) として挙げている。

> 「[〈方位〉・〈能成者〉・〈行為〉・〈時間〉は〈能力〉である。しかし] 「方位」・「能成者」・「行為」・「時間」といった [語] は，もの (vastu) を表示するものとして，諸事象の〈能力〉の相には絶対的に定位しない」[3]

パーニニ (Pāṇini) 文法学派の一員であるバルトリハリにとって，この現象世界はものの世界 (vastvartha) ではなく意味の世界 (śabdārtha) す

[2]Helārāja ad *VP*3.9.1: kriyānantaraṃ kāla uddiṣṭaḥ / sa hi kriyāyāḥ paricchedakaḥ / tatra darśanāntaralakṣitaṃ tāvat tatsvarūpam āha /

[3]*VP*3.6.1: diksādhanaṃ kriyā kāla iti vastvabhidhāyinaḥ / śaktirūpe padārthānām atyantam anavasthitāḥ //

訳は小川 [2000:543] に従った。同論文によれば，この詩節の主題は，〈方位〉などは，実体化されて「方位」といった名詞によって表示されるとき，その本来の〈能力〉の相は表示され得ず，その〈能力〉の相は他の言語項目に依存して表示される (asvaśabda) ということにある。しかし，本論文にとって重要な意味を持つのは，この詩節の主題よりはむしろこの詩節が〈方位〉などの四者を〈能力〉として挙げていること，そして〈行為〉の直後に〈時間〉を挙げるその枚挙の順序である。

なわち言葉から理解される意味体系そのものであり，それは，彼の言語哲学において原理としての〈言葉〉が有する〈能力〉の多様な展開として説明される[4]。そして，その〈言葉〉が有する様々な〈能力〉の中でももっとも基本的なものが *VP*3.6.1 において挙げられている〈方位〉・〈能成者〉・〈行為〉・〈時間〉なのである。

これは，小川 [2000:543] が既に指摘しているように，バルトリハリが現象世界の枠組みを四つの基本的な〈能力〉によって説明しようとしていることをよく示している。バルトリハリはこの現象世界を因果的なダイナミズムの世界として捉えた上で，その基軸に〈行為〉という〈能力〉を置き，その〈行為〉の成立のために〈能成者〉・〈方位〉・〈時間〉といった〈能力〉を想定しているのである[5]。

1.2.1. ところで，バルトリハリは，*VP* 第3巻において *VP*3.6.1 に言及した〈方位〉・〈能成者〉・〈行為〉・〈時間〉の順に論を進めている。しかし，すでに述べたように，バルトリハリは〈時間〉を『〈行為〉詳解』章に続く章の主題としながらも，自らの〈時間〉論ではなく，他の学派の学説を紹介することで『〈時間〉詳解』章を始めている。*VP*3.9.1 において，彼は次のように述べる。

> 「ある者達は次のように主張する (pracakṣate)。〈活動〉(vyāpāra) とは別個に〈時間〉というものが存在する。その〈時間〉は，常住 (nitya)，遍在 (vibhu)，単一 (eka) の〈実体〉(dravya) であり，〈行為〉を有するもの (kriyāvat) の尺度 (parimāṇa) である」[6]

ヘーラーラージャは，この詩節で言及されている「ある者達」とは，ヴァイシェーシカ (Vaiśeṣika) 学派の者達であると述べる。彼はこの詩節を次のように注釈している。

> 「〈時間〉は，「前」・「後」という知を［自己の］証相とし，遍在する，単一で形態を持たないものである。まさにこの故に，［〈時間〉は］作られたものではなく，それゆえ，［〈時間〉は］常住である。［そして，］常住な〈時間〉は〈行為〉と別個のものであり，〈生起〉などの〈行為〉を通じて事象 (bhāva) を画定するもの (bhāvaparicchedaka) である。〈時間〉は以上のようなものであると，ヴァイシェーシカ学派の者達によって［彼らの伝統の中で］伝承されている」[7]

1.2.2. 以上のようなヘーラーラージャの言明を根拠付けるために，以下ではヴァイシェーシカ学派の伝承文献の中に，*VP*3.9.1 において述べられている「ある者達」の見解と内容上一致する記述を探ることにしよう。

ヴァイシェーシカ学派の最古の経典である *Vaiśeṣikasūtra* (以下 *VS*[8]) 2.2.7–8 によれば，〈時間〉は単一で常住なる〈実体〉である[9]。しかしその単一な〈時間〉は，〈行為〉の違いによって多様化される[10]。〈時間〉は決して〈行為〉そのものではなく，「〈時間〉」という名称はあくまで

---

[4]小川 [2000:542–543]

[5]小川 [2000:543]。小川 [2000:543–544] によれば，〈能力〉とは因果的な〈根拠性〉(nimittabhāva) であり，従って〈方位〉・〈能成者〉・〈行為〉・〈時間〉といった四つの〈能力〉はそれぞれ空間概念の根拠・〈行為〉実現の根拠・〈結果〉産出の根拠・〈時間〉概念 (〈順序〉) の根拠として位置付けられる。現象世界の多様性を説明する根拠としての〈能力〉に関しては，Iyer [1969:108–110], Ogawa [1999:15–17], Ogawa [2000:16–23], Ogawa [forthcoming] を参照されたい。

[6]*VP*3.9.1: vyāpāravyatirekeṇa kālam eke pracakṣate / nityam ekaṃ vibhu dravyaṃ parimāṇaṃ kriyāvatām //

[7]Helārāja ad *VP*3.9.1: parāparādipratyayaliṅgo vyāpaka eko 'mūrto 'ta evākṛtakatvān nityaḥ kālaḥ kriyāvyatirikto janmādikriyādvāreṇa bhāvaparicchedako vaiśeṣikair āmnātaḥ /

[8]以下，*VS* からの引用は Muni Śrī Jambuvijayaji によってチャンドラーナンダ (Candrānanda) の *Vṛtti* とともに編集された刊本 (Jambuvijayaji [1961]) を基準とする。*VS* の刊本にはシャンカラミシュラ (Śaṅkaramiśra) の *Upaskāra* とともにŚrī Nārāyaṇamiśra によって編集されたもの (Nārāyaṇamiśra [1969]) もある。従って以下では，Nārāyaṇamiśra 本と Jambuvijayaji 本の読みが異なる場合，前者の読みを括弧の中に表示するという仕方で，*VS* のテキストを提示することにする。

[9]*VS*2.2.7: dravyatvanityatve vāyunā vyākhyāte (「[〈時間〉が] 〈実体〉であることと常住であることは，風［が〈実体〉であることと常住であることについての説明］によって説明された」)

*VS*2.2.8: tattvaṃ bhāvena (「[〈時間〉が］単一なものであること (tattva) は，存在 (bhāva)［が単一なものであることについての説明］によって［説明された］」)

なお筆者は *VS* を翻訳する際，金倉 [1971] と中村 [1977–78] の両翻訳研究を参考にした。

[10]*VS*2.2.9: kāryaviśeṣeṇa nānātvam(「〈行為〉の違いによって，［〈時間〉は］多様化される」)

Nārāyaṇamiśra 本にはこのスートラが欠けている。チャンドラーナンダは，スートラ中の 'kārya' は〈行為〉(kriyā) を意味する，ということを明らかにしている。このスートラに対する彼の注釈は次のようである。

〈時間〉の諸々の証相の原因であるものに適用される (*VS*2.2.10–11)[11]。〈時間〉の諸々の証相とは，此方なるもの［例えば若さ］に関して起こる「彼方［例えば老齢］である」(aparasmin param) という知，そして「同時である」(yugapat)・「同時ではない」(ayugapat)・「遅い」(ciram)・「速い」(kṣipram) という知である (*VS*2.2.6)[12]。さらに〈時間〉は，〈行為〉を有するものとは性質を異にするから，〈行為〉を一切有しないもの (niṣkriya) であり (*VS*5.2.23)[13]，「同時に実現された」(yugapat kṛtam) などの多様な知の機会因 (nimittakāraṇa) である (*VS*5.2.28)[14]。

また，*VS* 以後の代表的な綱要書の一つである *Praśastapādabhāṣya* (以下 *PBh*) において，〈時間〉は〈虚空〉や〈方位〉や〈アートマン〉とともに〈遍在性〉(sarvagatatva)・〈極大性〉(paramamahattva)・〈一切の結合せるものの共通の場所であること〉(sarvasamyogisamānadsatva) という性質を共有するものとして述べられている[15]。

以上のように，バルトリハリが *VP*3.9.1 において「ある者達」の見解として言及している〈時間〉の定義と内容上一致する記述は，ヴァイシェーシカ学派の伝承文献の中に数多く見い出される。このことから，われわれは『〈時間〉詳解』章の第一詩節において言及されている「ある者達」をヴァイシェーシカ学徒に同定することができるであろう[16]。

Jambuvijayaji [1961:17]: kāryaṃ kriyā, kriyāviśeṣeṇāviṣṭasya vastuna ārambhasthitivināśakriyā dṛṣṭvā ekasyāpi kālasya nānātvopacārād ārambhakālādivyapadeśaḥ /(「［スートラ中の］'kārya' は〈行為〉(kriyā) ［を意味する］。〈行為〉の違いによって影響されない事象に関して〈開始〉(ārambha)・〈存立〉(sthiti)・〈消滅〉(vināśa) といった［様々な］〈行為〉［が成立すること］を知覚した上で，単一なものであるのにもかかわらず，そのような時間に人々は多様性を比喩的に適用する (nānātvopacāra)。その［多様性の比喩的適用］に基づいて，［人々は，単一なる〈時間〉を］「開始時」(ārambhakāla) などと［多様に］表現する」)

[11] *VS*2.2.10: nityeṣv abhāvād anityeṣu bhāvāt (「【反論】［〈時間〉の証相は］常住なるものには存在しないから，［そして］無常なるものに［のみ］存在するから，［〈時間〉は〈行為〉に他ならない］」)

*VS*2.2.11: kāraṇe kālākhyā (「【答論】［それは正しくない。そうではなくて，］『〈時間〉』という名称は［〈時間〉の証相の］原因に対して起こる」)

Nārāyaṇamiśra 本では，*VS*2.2.10 と次の *VS*2.2.11 が分割されず一つのスートラになっている。

Nārāyaṇamiśra [1969:165]: nityeṣv abhāvād anityeṣu bhāvāt kāraṇe kālākhyeti また，Nārāyaṇamiśra 本では 'nityeṣv' の次の 'abhāvād' が 'bhāvād' になっているが，これは中村 [1977–78:36, fn.1] が指摘しているように，明白に 'abhāvād' ('bhāvād') の誤植である。

[12] *VS*2.2.6: aparasmin paraṃ yugapad ayugapad (Nārāyaṇamiśra [1969:165]: aparasmin aparaṃ yugapad) ciraṃ kṣipram iti kālaliṅgāni (「此方なるもの［例えば若さ］に関する『彼方［例えば老齢］である』という［知］，そして『同時である』・『同時ではない』・『遅い』・『速い』という［知］が〈時間〉の証相である」)

[13] *VS*5.2.23: dikkālākāśaṃ ca kriyāvadbhyo vaidharmyān (Nārāyaṇamiśra [1969:326]: kriyāvadvaidharmyān) niṣkriyāṇi (「また，〈方位〉と〈時間〉と〈虚空〉は，〈行為〉を有するものとは性質を異にするから，〈行為〉を有しない」)

[14] *VS*5.2.28: kāraṇena kāla (Nārāyaṇamiśra [1969:329]: kālaḥ) iti (「［同じ］理由によって，〈時間〉は［『同時に実現された』などの多様な知の機会因として］説明された」)

チャンドラーナンダはこのスートラを次のように説明している。

Jambuvijayaji [1961:44]: yenaiva kāraṇena pratyayabhedahetutvena dig vyākhyātā tenaiva yugapat kṛtam ityādipratyayabhedasya kālo nimittakāraṇaṃ vyākhyātaḥ / (「〈方位〉が［『東』・『西』などといった］多様な知の原因として説明されたのと同じ理由によって，〈時間〉は『同時に実現された』などの多様な知の機会因として説明された」)

[15] *PBh* [1984:22]: ākāśakāladigātmanāṃ sarvagatatvaṃ paramamahattvaṃ sarvasamyogisamānadeśatvaṃ ca // (「〈虚空〉・〈時間〉・〈方位〉・〈アートマン〉は，〈遍在性〉，〈極大性〉，〈一切の結合せるものの共通の場所であること〉［という性質］を持つ」)

〈結合せるもの〉(samyogin) とは，*PBh* の注釈者シュリーダラ (Śrīdhara) の説明によれば，形態を持つ〈実体〉(mūrtadravya) のことである。

Nyāyakandali(以下 *NK*) [1984:22]: ...sarvasamyoginām mūrtadravyāṇāṃ .../

[16] Halbfass [1993:207] によれば，ヘーラーラージャと同時代の人である可能性があるカシュミル (Kashmir) 出身のバットートパラ (Bhaṭṭotpala) は，ヴァラーハミヒラ (Varāhamihira) の *Bṛhatsaṃhitā*1.7 に対する注釈の中で，*VP*3.9.1 と関連してヴァイシェーシカ学派にはまったく言及せず，その代わりに多少神話的な色彩を帯びる〈時間論者〉の見解 (kālavāda) を *VP*3.9.1 の内容と関連づけている。*VP*3.9.1 に述べられている見解をヴァイシェーシカ学派の〈時間〉論ではなく，〈時間論者〉の考えに結びつけているという点で *Bṛhatsaṃhitā*1.7 に対するバットートパラの注釈は注目に値するが，残念なことに，論者はこの注釈を本論文を完成するまでに参照することができなかった。従って，現在の時点ではバットートパラの見解に対して明確な意見を述べることができない。バットートパラによる *VP*3.9.1 の解釈に関しては，今後の研究課題としたい。ただ，〈時間論者〉の見解と関連して，後述するように，厳密な理論的考察に基づいたある一定不変の見解が〈時間論者〉の思想として理解されたのではなく，時代と文献によって互いに異なる多様な思想が〈時間論者〉の見解と見なされてきたこと，そして Schayer [1938:7, fn.1] が述べているように，シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) の *Tattvasaṃgraha* などの，'kālavāda' という語が登場する後代の論書においては，'kālavāda' は〈時間〉を実在するものとみなすすべての哲学的立場を意味

2. 第1詩節においてヴァイシェーシカ学派の〈時間〉の定義を紹介した後，バルトリハリは第2詩節においては，〈時間〉のより一般的なそしてより基本的な性質について述べる。彼は *VP*3.9.2 において次のように言う。

「ディシュティ (diṣṭi)・プラスタ (prastha)・スヴァルナ (suvarṇa) などは形態を持つ［物体］の区別 (bheda) をもたらす。〈時間〉は〈行為〉の区別をもたらす。一方，〈数〉はすべてのものの区別者である」[17]

〈時間〉は形態を持たない (amūrti) 〈行為〉の差別化・画定の原因である[18]。これが〈時間〉の一般的かつ基本的な性質である。「差別化する・画定する」とはどのようなことか。そのことをバルトリハリは，ディシュティ等や〈数〉を引き合いにだすことによって示唆する。

ディシュティ・プラスタ・スヴァルナは特定の形態を持つ，遍在しない〈実体〉を画定する尺度である[19]。ディシュティは長さの尺度，プラスタは容積の尺度であり，スヴァルナは重さを量るための尺度である。そして〈数〉は形態を持つものと形態を持たないものすべての，そして〈数〉それ自体を含むすべての尺度の画定をもたらすものである[20]。

第1詩節において〈時間〉が〈行為〉を有するものの尺度であることが述べられた。この第2詩節において，そのことの意味が「〈行為〉を有するものの尺度であるということは，〈行為〉を差別化し画定するものである」というように説明されたのである。バルトリハリはこの第2詩節において，ヴァイシェーシカ学派による〈時間〉の定義を敷衍して述べる形式を取りながら，ヴァイシェーシカ学徒だけではなく，世間一般に承認される〈時間〉の基本的性質を述べていると理解すべきである。

3.1. 続けて *VP*3.9.3 においてバルトリハリは次のように述べる。

「区分されるもの (vibhakta) として存立するとき，〈時間〉そのものは，その［〈生起〉・〈存立〉・〈消滅〉］を持つ［事象］の〈生起〉，〈存立〉，そして〈消滅〉の機会因となる，と人々は述べる (āhuḥ)」[21]

バルトリハリは，この *VP*3.9.3 において，〈行為〉が〈時間〉によってどのように画定されるのかについて述べている[22]。ヘーラーラージャは本詩節を次のように説明している。

「〈生起〉，〈存立〉，〈消滅〉はすべての［個別的な］〈行為〉を［〈行為〉という］一つの集まり (kalāpa) に包摂する根拠である。ゆえに，〈時間〉はそれら［〈生起〉など］を通じて〈生起〉などを有する［すなわち〈行為〉を有する］事象の機会因となる，と人々は述べる。なぜならば，事象の〈生起〉などはその［〈時間〉］に依拠して区分されたものとして存立するからである。すなわち，「あるものは春に生じ，他のものは秋に生じ，また別のものは雨季に生じる」と言われるべきである。〈存立〉と〈消滅〉に関しても同様である。そして，限定的添性 (upādhi) の違いに基づいて差異化されるとき，〈時間〉は［それ自体と］関係を結ぶもの (saṃsargin) に差異をもたらすことができる」[23]

する言葉として使われていたことは銘記さるべきである。

[17] *VP*3.9.2: diṣṭiprasthasuvarṇādi mūrtibhedāya kalpate / kriyābhedāya kālas tu saṃkhyā sarvasya bhedikā //

[18] Helārāja ad *VP*3.9.2: ebhyo vyatiriktaḥ kālo 'mūrti-kriyāparicchedahetuḥ / sūryādisañcāro hi kālena mīyate māsaḥ saṃvatsara ityādi /（「〈時間〉は，これら［の尺度］と異なる，形態を持たない〈行為〉の画定の原因である。なぜならば，太陽など［の天体］の運行は〈時間〉によって量られるからである。『月』・『年』などというように」）

[19] Helārāja ad *VP*3.9.2: mūrtir asarvagatadravya-parimāṇam / tat (Trivandrum, Raghunātha. Iyer: sa) paricchidyate diṣṭyādyāyāmamānena / tathā (Benares, Trivandrum, Raghunātha. Iyer: tadhā) ca mūrtimadvastugatam etad diṣṭir vitastir ityādi /（「形態 (mūrti) とは，遍在しない〈実体〉の度量 (parimāṇa) である。その［遍在しない〈実体〉］はディシュティなどの長さの尺度によって画定される。そしてそのような場合，この「ディシュティ」・「ヴィタスティ (vitasti)」など［の尺度］は形態を持つもの (vastu) に関わる」）

[20] Helārāja ad *VP*3.9.2: saṃkhyā tu mūrtāmūrtasya sarvasya paricchedam ādadhāti pramāṇādeś ca / ... saṃkhyāpi ca saṃkhyayā mīyate /（「一方，〈数〉は形態を持つものと形態を持たないものすべての，そして［すべての］尺度などの画定をもたらす。・・・また，〈数〉も〈数〉によって量られる」）

[21] *VP*3.9.3: utpattau ca sthitau caiva vināśe cāpi tadvatām / nimittaṃ kālam evāhur vibhaktenātmanā sthitam //

[22] Helārāja ad *VP*3.9.3: kālena kathaṃ kriyāḥ paricchidyante (Trivandrum, Raghunātha. Iyer: parinchidyante) ity āha /（「どのような仕方で〈行為〉が〈時間〉によって画定されるかを［バルトリハリは次のように］述べる」）

[23] Helārāja ad *VP*3.9.3: janmasthitivināśāḥ samasta-kriyākalāpāntarbhāvanahetava iti taddvāreṇa janmādimatāṃ

〈生起〉・〈存立〉・〈消滅〉を通じて，多様なすべての個別的な〈行為〉は〈行為〉という一つの集まりに包摂される[24]。ゆえに，〈時間〉が〈生起〉・〈存立〉・〈消滅〉の機会因となるということは，多様なすべての〈行為〉の機会因となるということを意味する。すべての〈行為〉の機会因としての〈時間〉の作用は，〈生起〉を例として挙げるならば，「特定のものは必ず特定の〈時間〉に生じて，それ以外の〈時間〉には生じない」という形で経験される。このように事象の〈生起〉が時間的に区分されることこそ，〈時間〉による〈生起〉という〈行為〉の区分・画定の結果なのである。

〈時間〉は本来単一なるものである。従って，多様なすべての〈行為〉の画定者として作用するためには，〈時間〉は多様に区分されなければならない。〈時間〉の区分は限定的添性として〈時間〉と関係を結んでいる〈行為〉によってなされる。すなわち，〈時間〉と〈行為〉は相互に区分しあう関係にあるのである[25]。バルトリハリは次のように述べる。

> 「その〈時間〉自体は，自己とは別個であるところの〈属性〉[である〈行為〉] を拠り所とする差異によって多様に区分される。なぜならば，いかなる事象 (vastu) も，[それ自体としては] 異なるものでも，同一なものでもないからである」[26]

> 「しかし，[〈時間〉と] 関係を結ぶものに属する差異 (bheda) は，その [〈時間〉] が持つ特性 (viśeṣa) とみなされる。その〈時間〉は，それら [関係を結んでいるものに属する差異] によって区分されるとき，[『昼』・『夜』などの，世間において] 確定されている [単位の] 区分 (bheda) をもたらす」[27]

3.2. 以上のように，*VP*3.9.3においては〈時間〉が〈行為〉の機会因となることが明示された。そして，〈時間〉が〈行為〉を差別化するものであるために，〈時間〉自体が〈行為〉によって差別化されるものであることが前提されていた。

ところで，このような見解は，決してバルトリハリだけのものではない。前述したように，*VS*2.2.8–9には単一で常住なる〈時間〉は〈行為〉の違いによって多様化される，ということが述べられている。そして，プラシャスタパーダ (Praśastapāda) はこの *VS*2.2.8–9の内容と関連して，〈時間〉は第一義的には単一なるものであるが，一切の結果の実現の〈開始〉(sarvakāryāṇāṃ ārambha)・〈行為〉の〈完結〉(kriyābhinirvṛtti)・〈存立〉(sthiti)・〈消滅〉(nirodha) といった限定的添性の差異に基づいて，比喩的に多様なものとして表現されると説明している[28]。

---

padārthānāṃ nimittakāraṇaṃ kālam āhuḥ / tadapekṣo hi padārthānām udayādir avatiṣṭhate pravibhaktaśarīraḥ / tathā hi / kecid vasante prasūyante, apare śaradi, prāvṛṣy anya ityādi vācyam / evaṃ sthitivināśayor api / upādhibhedāc ca bhidyamānaḥ kālaḥ saṃsargiṣu bhedāyālam //

[24] *VP*1.3において，バルトリハリは〈生起〉などの〈有〉(bhāva) の六つの変容 (vikāra) が個別的な〈有〉(bhāvabheda)，すなわち動詞語根の意味であるすべての個別的な〈行為〉の母体 (yoni) であると述べている。〈有〉の六つの変容とは，ヤースカ (Yāska) の *Nirukta*1.2によれば，〈生起〉・〈成長〉(vardha)・〈存立〉・〈変化〉(vipariṇāma)・〈衰退〉(apakṣaya)・〈消滅〉の六つである。従って，ヘーラーラージャが〈生起〉・〈存立〉・〈消滅〉について「すべての個別的な〈行為〉を〈行為〉という一つの集まりに包摂する根拠」と言うとき，*VP*1.3の内容を念頭に置いていたことは，疑いの余地のないことである。

*VP*1.3と *Nirukta*1.2の翻訳は，第4章において原文とともに提示する。従って，ここでは提示しない。

[25] この点については李 [forthcoming] において詳細に論じた。

[26] *VP*3.9.6: tasyātmā bahudhā bhinno bhedair dharmāntarāśrayaiḥ / na hi bhinnam abhinnaṃ vā vastu kiṃcana vidyate //

[27] *VP*3.9.8: saṃsargiṇāṃ tu ye bhedā viśeṣās tasya te matāḥ / sa bhinnas tair vyavasthānāṃ kālo bhedāya kalpate //

[28] *PBh* [1984:64]: kālaliṅgāviśeṣād añjasaikatve 'pi sarvakāryāṇām ārambhakriyābhinirvṛttisthitinirodhopādhibhedān maṇivat pācakavad vā nānātvopacāra iti //（「〈時間〉の証相に違いがないから，[〈時間〉は] 一次的には単一なるものである。しかしながら，一切の結果の [実現の]〈開始〉(ārambha)・〈行為〉の〈完結〉(kriyābhinirvṛtti)・〈存立〉・〈消滅〉といった限定的添性の差異に基づいて，[〈時間〉は] 多様なものとして比喩的に表現される。あたかも宝石 [が青色などの限定的添性の差異に基づいて『青い』などと表現されること] と同じように，或は [同一な人が料理という〈行為〉をするとき，]『料理人』[と呼ばれ，読書という〈行為〉をするとき，『読書人』と呼ばれること] と同じように」）

この *PBh* の文章において例として挙げられている宝石と料理人について，*NK* は次のように説明している。

NK [1984:66]: yathaiko maṇiḥ sphaṭikādir nīlādyupādhibhedān nīla iyi vyapadiśyate .../ pācaketi / yathaikasya puruṣasya pacanādikriyāyogāt pācaka iti pāṭhaka iti vyapadeśaḥ .../

（「例えば，水晶などの宝石が青色などの限定的添性の違いに基づいて『青い』とか『黄色い』と表現されることと同じように・・・(中略)・・・『料理人』について。例えば，料理などの〈行為〉と結びつくことを通じて，同

さらに，プラシャスタパーダは〈時間〉と〈虚空〉は〈数〉(saṃkhyā)・〈量〉(pramāṇa)・〈別異性〉(pṛthaktva)・〈結合〉(saṃyoga)・〈分離〉(vibhāga) という五つの性質と，〈生起〉を有するすべてのものの機会因であること (sarvotpattimatāṃ nimittakāraṇatvam) という性質を共有すると述べる[29]。シュリーダラは *NK* においてこの文章を説明して，〈方位〉と〈時間〉が機会因であるということの意味は，結果が特定の場所と特定の〈時間〉に起こって，他の場所と〈時間〉においては起こらないことであると語っている[30]。

1.2.2 において述べたように，ヴァイシェーシカ学派の伝統的な見解においては〈時間〉は活動を全く持たないものである。従って，ヴァイシェーシカ学派の者達が言うところの「機会因」としての〈時間〉とは，Halbfass [1993:209–213] が指摘しているように，積極的な意味での「原因」という言葉が指すもの—すなわち内属因 (samavāyikāraṇa) と非内属因 (asamavāyikāraṇa) —が持つ性質を欠く，単にそこにおいて様々な〈行為〉が起こるところの〈基体〉に過ぎないものである，と理解することができる[31]。

〈時間〉に対するこのようなヴァイシェーシカ学派の見解は，確かにバルトリハリの考えとは本質的に異なるものである。しかし *VP*3.9.3 の内容と，それに対するヘーラーラージャの注釈を見る限り，ヴァイシェーシカ学派の見解と区別される，〈時間〉を現象世界を成立せしめる〈能力〉とみなすバルトリハリ独自の〈時間〉論がそこにまだ見出されないことも否定できない事実である。*VP*3.9.3 においては，バルトリハリはただ〈時間〉がそれと関係を結ぶ〈行為〉によって区分されるとき，〈生起〉などを有する事象の〈生起〉・〈存立〉・〈消滅〉の機会因となり，そして機会因としての〈時間〉の作用はこの現象世界において「特定のものは必ず特定の〈時間〉に生じて，それ以外の〈時間〉には生じない」という形で経験される，ということを述べているだけなのである。そして今まで検討したように，それはヴァイシェーシカ学派の人々によっても承認されていることなのである。

4.1. バルトリハリは，*VP*3.9.1 においてヴァイシェーシカ学派の〈時間〉観を提示し，*VP*3.9.2 において一般的に認められる〈時間〉の性質について語り，そして *VP*3.9.3 において同学派の者達と自らが共有する見解を述べた。*VP*3.9.4 に至ってようやく彼は，現象世界を成立せしめる〈能力〉という彼独自の〈時間〉理解を披瀝する。彼は次のように述べる。

> 「人々は，その［〈時間〉］はこの世界という操り人形 (lokayantra) を操るもの (sūtradhāra) であると述べる (pracakṣate)。その［〈時間〉］は〈抑制〉(pratibandha) と〈認容〉(abhyanujñā) を通じて世界を区分する」[32]

現象世界において成立している様々な活動は，〈時間〉によって制御される。そのような意味で，この現象世界は操り人形に類似するものであり，〈時間〉はその人形を操る人形師も同然のものであると言われる[33]。

一の人が『料理人』とか『読書人』と呼ばれることと同じように・・・」)

尚，これとまったく同じ考えをバルトリハリは *VP*3.9.32 において次のように述べている。

*VP*3.9.32: kriyābhedād yathaikasmiṃs takṣādyākhyā pravartate/ kriyābhedāt tathaikasminn ṛtvāyākhopajāyate // (「〈行為〉の違いに基づいて，一人の［〈行為主体〉］に対して『大工』などの名前が起こる。それと同じように，〈行為〉の違いに基づいて単一な［〈時間〉］に対して『季節』などの名前が生じる」)

[29] *PBh* [1984:25]: dikkālayoḥ pañcaguṇavattvam sarvotpattimatām nimittakāraṇatvam ca // (「〈方位〉と〈時間〉は五つの〈属性〉［，すなわち〈数〉・〈量〉・〈別異性〉・〈結合〉・〈分離〉という五つの性質］を持つものであり，〈生起〉を有するすべてのものの機会因である」)

[30] *NK* [1984:25]: idam eva ca deśasya kālasya ca nimittatvaṃ yad ekatra kāryotpattir anyatrānutpattir iti // (「また，ある［〈時間〉と場所］において［のみ］結果が生じて，他の［〈時間〉と場所］においては［その結果が］生じないこと，まさにこれが〈方位〉と〈時間〉が機会［因］であること［の意味］である」)

[31] 実際に，シャンカラミシュラは *VS*5.2.26 (Jambuvijayaji 本では *VS*5.2.28) に対する注釈の中で〈時間〉が〈運動〉(karman) の機会因であることと関連して，〈時間〉は〈運動〉が起こるところの〈基体〉に過ぎず，決して〈運動〉の内属因ではないと説明している (Nārāyaṇamiśra [1969:329]: tena nimittatvenādhāramātraṃ karmaṇaḥ kālo na tu samavāyīty arthaḥ //)。

[32] *VP*3.9.4: tam asya lokayantrasya sūtradhāraṃ pracakṣate / pratibandhābhyanujñābhyāṃ tena viśvaṃ vibhajyate //

[33] Helārāja ad *VP*3.9.4: yantrapuruṣaprakhyaṃ viśvaṃ sūtradhārapuruṣakalpakālapratibaddhaceṣṭam / (「その動きが［人形を］操るものも同然である〈時間〉に結び付け

バルトリハリがこの詩節の ab 句において「人々は述べる (pracakṣate)」という表現を用いていることに注目すべきである。これは，彼以外にも〈時間〉をこの世界の活動すべてを操るもの，世界を成立せしめるものとして理解する人々が存在していたことを暗示している。

実際に，われわれはインド哲学の最古の文献の一つである *Atharvaveda* (以下 *AV*)19.53–54 に登場する〈時間〉讃歌の中で，*VP*3.9.4ab 句が伝える主張と内容上相通じるものを多数見出すことができる。

「彼は実に万有を成立せしめり。彼は実に万有を包囲せり。彼はその父にして，その子となれり (神秘的循環発生)。これに勝る威力は他にあることなし」[34]

「『時』はかの天を生めり。また『時』はこれらの地界を生めり。既存のもの・未存のものは，『時』に促されて展開す」[35]

「彼により促され，彼により産出せられて，この万有は彼のうちに安立す。『時』はブラフマンとなりて，最勝者 (プラジャー・パティ) を支う」[36]

*AV*19.53.4 と 19.53.9 に言及されている「彼」は，もちろん〈時間〉を意味する。この一連の讃歌において，〈時間〉は天と地を始めとする，この世界に存在するすべてのものを生み出して展開させるものであり，万有がそこにおいて存立する〈基体〉であるものとして述べられている。〈時間〉に関して〈時間〉讃歌の内容と類似する見解を持つ者達は，*AV* より後代の文献においては「〈時間論者〉」(kālavādin, kālacintaka) と呼ばれる[37]。

しかし，「〈時間論者〉」という名前で呼ばれていても，実際の〈時間論者〉達に統一した厳密な〈時間〉論が存在していたのではない。最初に *AV* において登場して以来，〈時間論者〉の思想は *Upaniṣad* を経て *Mahābhārata* に継承され，それらの文献においては〈時間〉はすべての存在の生成・破壊を司る絶対的な神や運命 (gati) と考えられている[38]。そして様々な *Purāṇa* 文献に至っては，〈時間〉はシヴァ (Śiva) やヴィシュヌ (Viṣṇu) と同一視されている[39]。このことは，〈時間論者〉達の見解が綿密な理論的考察の結果であるよりは，Pannikar [1976:65–66] が述べているように，一般民衆の考えや信仰が反映された，世俗的な〈時間〉理解に近いものであったことを示している。

4.2. 以上のようにバルトリハリは，*VP*3.9.4 の ab 句において〈時間論者〉達の世俗的な〈時間〉理解を伝え，同詩節の cd 句においては，〈時間論者〉達の見解を彼自身の考えに基づいて再解釈して，彼自身の言葉で再び表現している。*VP*3.9.4 のこのような構造は，ヘーラーラージャの注釈を通じても読み取ることができる。引用した *VP*3.9.4ab 句に対する注釈に続いて，cd 句を注釈して，ヘーラーラージャは次のように述べる。

「なぜならば，[人形に繋がっている] 糸を動かすことによって，[操り人形に] 目を開いたり，閉じたりするなどの〈行為〉をもたらす〈操るもの〉のように，〈時間〉は，[〈抑制〉と〈認容〉という] 自己の〈能力〉を通じて，事象の〈出現〉(pratisthagana) と〈隠去〉(unmajjana)—〈生起〉と〈消滅〉の同義語である—を区分するとき，世界に [〈時間〉的] 連続性 (paurvāparya) を獲得させ，区分を特徴とする活動をもたらすからである」[40]

〈時間〉には〈抑制〉と〈認容〉という二つ

られているところの [この] 世界は，操り人形に類似するものである」)

[34] *AV*19.53.4.

翻訳は辻 [1967:119] に従った。以下に引用する *AV* の翻訳も，すべて辻 [1967:119] によるものである。

[35] *AV*19.53.5.

[36] *AV*19.53.9.

[37] 代表的な例として，*Gauḍapādakārikā*(以下 *GPK*)1.8 を挙げることができる。

*GPK*1.8: icchamātraṃ prabhoḥ sṛṣṭir iti sṛṣṭau viniścitāḥ / kālāt prasūtiṃ bhūtānāṃ manyante kālacintakāḥ // (「創造 (sṛṣṭi) に関して，創造は神の意志 (icchā) のみによって起こる，と確定する人々がいる。[一方，] 〈時間論者〉(kālacintaka) 達は，諸々の存在の創造は〈時間〉によって起こると考える」)

[38] *Mahābhārata*1.224.5–54, 12.231.25, 12.227.79.

[39] *Viṣṇupurāṇa*1.2.26, *Bhāgavatapurāṇa*1.2.6, etc. 〈時間論者〉の見解が多様な文献の中でどのように変化していたかについては，Wesendonk [1931:56–67], Schayer [1938:1–12], Pannikar [1976:63–73], 中村 [1950:222–223] を参照されたい。

[40] Helārāja ad *VP*3.9.4: kālena hi svaśaktyā bhāvānāṃ sthaganonmajjane janmanāśaparyāye vibhajatā sūtradhāreṇeva yantrapuruṣasya sūtrasañcāravaśenonmeṣanimeṣādikriyākāriṇā viśvaṃ prāptapaurvāparyapravibhāgaṃ pravibhāgalakṣaṇāś ceṣṭāḥ kāryante //

の作用がある。ヘーラーラージャはこの二つを〈時間〉の〈能力〉と理解している。彼の説明によれば,〈抑制〉とは,〈行為〉の〈能成者〉が持つ〈能力〉の働きを妨げること,或は事象が自己の結果を生み出すことができないようにすることであり,〈認容〉はその反対のことである[41]。このように〈時間〉は様々な〈行為〉を引き起こす〈能成者〉,すなわち〈行為〉の原因が有する〈能力〉を妨げたり,扶助したりすることによって,現象世界における一切の事象を制御する。

ヘーラーラージャは *VP*3.9.4 の cd 句に対する注釈の中で,明確に cd 句を ab 句に対する理由或は根拠として解釈している。すなわち,〈時間〉が〈時間論者〉達が主張するようにこの世界において起こる活動すべてを制御するもの,現象世界を成立せしめるものであり得るのは,〈時間〉が〈抑制〉と〈認容〉という自己の二つの作用を通じて,現象世界における活動を引き起こす原因が持つ〈能力〉を妨げたり,扶助したりするからである。そしてまさにこのような意味で,〈時間〉は「様々な事象を引き起こす原因の〈能力〉を使役するもの」(śaktīnāṃ prayogasya hetuḥ) と表現される。*VP*3.9.9 においてバルトリハリは次のように述べる。

> 「特定の〈時間〉と関係を結ぶことを通じて,[原因が持つ]〈能力〉の活動の獲得 (vṛttilābha) は可能となる。その[〈時間〉]は〈能力〉の使役の原因として存立する」[42]

一切の事象を引き起こす原因の〈能力〉を使役するものである〈時間〉は,決して事象の内属因・質料因 (upādānakāraṇa) ではない[43]。しかし,〈時間〉が内属因であることを否定した上で,〈時間〉をただ〈運動〉などがそこにおいて起こるところの〈基体〉に過ぎないものとして理解するヴァイシェーシカ学徒とは違って,バルトリハリは〈時間〉が現象世界における様々な事象の機会因であることを二つの側面から説明している。すなわち,彼によれば〈時間〉は 1) 様々な事象の〈生起〉などがそこにおいて起こるところの〈基体〉であるという点で,すべての事象の機会因であり,さらに 2) 様々な事象を引き起こす原因が持つ〈能力〉を使役するものであるという点で,すべての事象の機会因となるのである。特に,事象を引き起こす様々な原因の〈能力〉を使役するものとしての〈時間〉は,究極的な唯一実在であるブラフマンの〈自立性 (能力)〉(svātantrya),或は〈行為主体としての能力〉(kartṛśakti) と呼ばれる。*VP*1.3 とそれに対する *Vṛtti* において,バルトリハリは次のように述べる。

> 「それに部分が仮構されるところの,その[ブラフマン]の〈時間〉という〈能力〉に依拠して,〈生起〉などの六種の変容[44]が起こる。それ

[41] Helārāja ad *VP*3.9.11: ...bhāvātmanaś ca pratibandhaḥ svakāryāsāmarthyaṃ...(「・・・そして,事象それ自体の〈抑制〉,すなわち[事象が]自己の結果を生み出すことができないこと・・・」)

Helārāja ad *VP*3.9.30: kasyāścit kriyāyāḥ sādhanaśaktīnāṃ vyāpāravighāte pratibandhaḥ / tadviparyayo 'bhyanujñā / (「ある〈行為〉の〈行為実現者〉が持つ能力の働きが妨げられるとき,[その〈行為〉]に対する〈抑制〉が起こる。その[〈抑制〉の]反対が〈認容〉である」)

[42] *VP*3.9.9: viśiṣṭakālasaṃbandhād vṛttilābhaḥ prakalpate / śaktīnāṃ saṃprayogasya hetutvenāvatiṣṭhate //

[43] *Vṛtti* ad *VP*1.3: sarveṣāṃ hi vikārāṇāṃ kāraṇāntareṣv apy apekṣāvatāṃ pratibaddhajanmanām abhyanujñayā sahakārikāraṇaṃ kālaḥ / (「なぜならば,他の原因にも依存している,それの〈生起〉が〈抑制〉されていたところのすべての変容体[の〈生起〉]を〈認容〉することによって,〈時間〉は[そのすべての変容体の]〈協同因〉(sahakārikāraṇam) となるからである」)

Paddhati on Vṛtti ad *VP*1.3: sahakārikāraṇam iti / nopādānakāraṇam / (「〈協同因〉について。[〈時間〉は]質料因ではない[という意味である]」)

[44] 〈生起〉などの〈有〉の六の変容については,ヤースカの *Nirukta* にある次の文章を参照。

*Nirukta*1.2: ṣaḍ bhāvavikārā bhavantīti vārṣyāyaṇir jāyate 'sti vipariṇamate vardhate 'pakṣīyate vinaśyatīti / jāyate iti pūrvabhāvasyādim ācaṣṭe / nāparabhāvam ācaṣṭe na pratiṣedhati / astīty utpannasya sattvasyāvadhāraṇam / vipariṇamate ity apracyavamānasya tattvād vikāram / vardhate iti svāṅgābhyuccayam / sāṃyaugikāmāṃ vārthānām / vardhate vijayeneti vā / vardhate śarīreṇeti vā / apakṣīyate iti etenaiva vyākhyātaḥ pratilomam / vinaśyatīty aparabhāvasyādim ācaṣṭe / na pūrvabhāvam ācaṣṭe na pratiṣedhati / (「ヴァールシャーヤニ (Vārṣyāyaṇi) は,実に『六つの bhāva の様態がある』と[述べた]。[bhāva の六様態とは] jāyate(『x が生起する』)・asti(『x が在る』)・vipariṇamate(『x が変化する』)・vardhate(『x が成長する』)・apakṣīyate(『x が衰退する』)・vinaśyati(『x が滅する』)である。jāyate(「x が生じつつある」)という語によってひとは最初の bhāva [すなわち生起] の始まりを語り,後続の bhāva [すなわち asti の表示対象] を語ることもなければ否定することもない。asti(「x が在る」)という語によってひとは生起したものの存在性に対する

ら［六つの変容］は個別的な［動詞語根の意味である料理〈行為〉といった］〈有〉(bhāva) の母胎である」[45]

「実に，他立的で，〈生起〉を有するすべての〈能力〉［，すなわち事象］は〈時間〉と呼ばれる〈自立性［能力］〉によって活動を開始する (samāviṣṭa)。それら［〈時間〉と呼ばれる〈自立性能力〉によって活動を開始するすべての〈能力〉］は，〈時間能力〉の活動に随順する」[46]

5.1. バルトリハリは『〈時間〉詳解』章の第 1 詩節において，〈時間〉を〈活動〉すなわち〈行為〉とは別個に存在する，常住，遍在，単一の〈実体〉であり，〈行為〉を有するものの尺度であるという「ある者達」の主張を紹介している。この「ある者達」とは，ヘーラーラージャの注釈通り，ヴァイシェーシカ学派の学匠たちのことである。

続いて第 2 詩節において，バルトリハリは〈時間〉がどのようにして「〈行為〉を有するものの尺度」となるのかについて述べる。〈時間〉は〈行為〉の画定者であり，〈行為〉を画定することを通じて，〈行為〉を有するものの尺度となる。

第 3 詩節においては，〈行為〉の画定が持つ因果論的意味が述べられる。〈時間〉が〈行為〉を画定することは，その〈行為〉の機会因として作用することを意味する。多様な〈行為〉の画定者となるために，本来単一な〈時間〉は多様化されなければならない。〈時間〉は自分が画定者として関係を結ぶ〈行為〉によって多様化される。この第 3 詩節においても，バルトリハリは他の人々の見解を借りて議論を進めている。

そして，第 4 詩節において彼は，〈時間〉が〈行為〉の機会因として機能するということは，〈時間〉が自己の〈抑制〉と〈認容〉という二つの作用を通じて現象世界において起こる〈行為〉を制御することであると説明する。彼独自のこの見解を述べる際にも，バルトリハリは〈時間〉を操り人形を操るものとして比喩的に表現する伝承を引用している。

*VP*3.9.1–4 に見られる以上のような展開と関連して注目したいのは 4.2. に引用した *VP*1.3 とそれに対する *Vṛtti* である。そこでは，〈時間〉は〈語ブラフマン〉が持つ〈自立性能力〉であるという彼自身の〈時間〉論が提示されていた。このことが示すもの，それは，バルトリハリは *VP*1.3 において自身の〈時間〉観を明らかにした上で，『〈時間〉詳解』章の初めの一連の詩節においてはそのことを前提とした〈時間〉論を展開しているというまさにこのことである。

VP のどの章においても，バルトリハリは彼以前のそして同時代の様々な見解を受け入れた上で，それらすべてを現象世界の成立を〈語ブラフマン〉が有する多様な〈能力〉の展開によるものと理解する彼独自の形而上学に基づいて総合する，という仕方で自らの思想体系を成立せしめている。『〈時間〉詳解』章に関しても，同様のことを言うことができる。*VP*1.3 とそれに対する自注において形而上学的な視点から〈時間〉を詳論したバルトリハリは，*VP*3.9.1–4 においてヴァイシェーシカ学派の〈時間〉論を始めとする，当時世間において知られていた様々な〈時間〉観に言及し，またそれらを自分の思想の枠の中に取り入れようとしているのである。

5.2. この作業を通じてバルトリハリが達成しようとする目的は明らかである。それは，彼自身の形而上学に基づき，言語活動 (vyavahāra) の

制限を語る。vipariṇamate(「x が変化する」) という語によってひとは本質を失っていないものの変容について語る。vardhate(「x が成長する」) という語によってひとは自身の肢体の増大，あるい領土併合から得られた利財の増大について語る。vardhate vijayena(「彼は勝利によって増大する」) あるいは vardhate śarīreṇa(「彼は身体が成育している」) というように。apakṣīyate(「x が衰退する」) という語によっては，ひとはまさにこの同じことを通じて［上述の］説明とは逆に［語る］。vinaśyati という語によってはひとは最後の bhāva［すなわち滅］の始まりを語り，先行の bhāva［すなわち衰］を語ることもなければ否定することもない」)

翻訳は小川 [2002:783–784] に依拠した。

[45] *VP*1.3: adhyāhitakalāṃ yasya kālaśaktim upāśritāḥ / janmādayo vikārāḥ ṣaṭ bhāvabhedasya yonayaḥ //

[46] *Vṛtti* ad *VP*1.3: kālākhyena hi svātantryeṇa sarvāḥ paratantrā janmavatyaḥ śaktayaḥ samāviṣṭāḥ kālaśaktivṛttim anupatanti /

ヴリシャバデーヴァ (Vṛṣbhadeva) は *VP*1 とその *Vṛtti* に対する注釈文献 *Paddhati* の中で，「〈自立性〉」という語を説明して，次のように〈行為主体としての能力〉と言い換えている。

Paddhati on Vṛtti ad *VP*1.3: svātantryaṃ kartṛśaktiḥ / padārthaniṣpādanopasaṃhārayogyā kartṛśaktiḥ /(「〈自立性〉とは，〈行為主体として能力〉のことである。〈行為主体としての能力〉は，事象を生み出したり，帰滅させたりすることができる」)

世界における多様な〈時間〉理解と〈時間〉表現を一貫性を持って説明することである。そして,『〈時間〉詳解』章が世俗の人々の〈時間〉理解に近いヴァイシェーシカ学派の〈時間〉観を述べることで始まることは,バルトリハリが,既にその目的を成し遂げるための第一段階として *VP*1.3 において自身の形而上学的〈時間〉論を詳述している,というまさにこのことに基づいて理解されるべきである。

略号および参考文献

Benares: Benares edition of *Vākyapadīya*. See Śāstrī, G. Dāmodara[1930].

GPK: *Gauḍapādakārikā*. See Karmarkar[1953].

Helārāja: Helārāja's *Prakīrṇaprakāśa*. See Iyer[1963], [1973].

Nirukta: Yāska's *Nirukta*. See Sarup[1967].

NK: Śrīdhara's *Nyāyakandali*. See Dvivedin[1984].

Paddhati: Vṛṣbhadeva's *Paddhati*. See Iyer[1966].

PBh: *Praśastapādabhāṣya*. See Dvivedin[1984].

Trivandrum: Trivandrum edition of *Vākyapadīya*. See Śāstrī, K. Sāmbhaśiva[1935].

VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau[1977].

Vṛtti: *Vṛtti* ad *Vākyapadīya* See Iyer[1966].

VS: Kaṇāda's *Vaiśeṣikasūtra*. See Jambuvijayaji [1961].

Dvivedin, V. Prasad

1984 *Praśastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandali of Śrīdhara*, 2nd ed. Sri Satguru Publications (Sri Garib Dass Oriental Series 13).

Halbfass, Wilhelm.

1993 *On Being and What There Is: Classical Vaiśeṣika and the History of Indian Ontology*. First Indian ed. Sri Satguru Publications (Sri Garib Dass Oriental Series 168).

Iyer, K. A. Subramania

1963 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I*, Poona: Deccan College (Deccan College Monograph Series 21).

1966 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentaries Vṛtti and the Paddhati of Vṛṣabhadeva, Kāṇḍa I*, Poona: Deccan College (Deccan College Monograph Series 32).

1969 *Bhartṛhari. A Study of the Vākyapadīya in the Light of the Ancient Commentaries*. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute (Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 68).

1973 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Prakīrṇaprakāśa of Helārāja, Kāṇḍa III, Part II*, Poona.

Jambuvijayaji, Muni

1961 *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*, Baroda: Oriental Institute (Gaekward's Oriental Series No.136).

Karmarkar, R. Damodar

1953 *Gauḍapāda–Kārikā. Edited with a complete Translation into English, Notes, Introduction, and Appendices*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute (Government Oriental Series Class B, No.9). Reprint, 1973.

Nārāyaṇamiśra, Śrī

1969 *Vaiśeṣikasūtropaskara of Śrīśaṅkaramiśra with The 'Prakāśikā' Hindi Commentary*, 2nd ed. Varanasi: The Chowkhamba Sanskrit Series Office (The Kashi Sanskrit Series 195).

Ogawa, Hideyo

1999 "Bhartṛhari on śakti: the the Vaiśeṣika Categories as *Śakti*". *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 47–2: 1003–1010.

2000 "Bhartṛhari on the non-distinction between reality and unreality". *Studies in the History of Indian Thought (Indo-shisoshi Kenkyū)* 12: 5–27.

forthcoming "On Bhartṛhari's notion of 'power' (*śakti*)". (Appearing in the proceedings of the Second International Conference on Bhartṛhari).

Pannikar, Raimundo.

1976 "Time and History in the Tradition of India: Kāla and Karma." In *Culture and Time*, ed. by L. Gaslet *et al*, 63–88. Paris: UNESCO press.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1974 *Vākyapadīyam Part III (Pada Kāṇḍa) (Jāti, Dravya and Saṃbandha Samuddeśa)* with the Commentary *Prakāśa* by Helārāja and *Ambākartrī* by Pt. Raghunātha Śarmā. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University (Sarasvatībhavana-Granthamālā Vol. 91). Second edition: 1991.

1979 *Vākyapadīyam Part III, Vol. II (Pada Kāṇḍa) (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṃkhyā, Upagraha, and Liṅga Samuddeśa)* with the Commentary *Prakāśa* by Helārāja and *Ambākartrī* by Pt. Raghunātha Śarmā. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University (Sarasvatībhavana-Granthamālā Vol. 91). Second edition: 1997.

Rau, Wilhelm.

1977 *Bhartṛharis Vākyapadīya. Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes 42, 4).

2002 *Bhartṛharis Vākyapadīya. Versuch einer vollständigen deutschen Übersetzung nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās*, hrsg. von Oskar von Hinüber. Stuttgart: Franz Steiner Verlag (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur 8).

Sarup, L
1967 *The Nigaṇṭu and the Nirukta*. Delhi: Motilal Banarsidass.
Śāstrī, K. Sāmbhaśiva
1935 *The Vākyapadīya (3rd Kāṇḍa) With The commentary Prakīrṇaprakāśa of Helārāja son of Bhūtirāja*. Part I. Trivandrum: Government Press (Trivandrum Sanskrit Series No.CXVI).
Śāstrī, G. Dāmodara
1930 *Vākyapadīya, A Treatise On The Philosophy of Sanskrit Grammar by Bahrṭṛhari, With a Commentary by Helārāja*. Vol. II, Fasciculus V. Benares: Vidya Vilas Press (Benares Sanskrit Series No.161).
Schayer, Stanislaw.
1938 *Contribution to the Problem of Time in Indian Philosophy*. Krakow.
Wesendonk, O. G. Von
1931 "The Kālavāda and the Zervanite System". *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 53–109.
赤松明彦
1998『古典インドの言語哲学 1　ブラフマンについて』(東洋文庫 637) 平凡社
小川英世
2000「バルトリハリの〈能成者〉論」(『インドの文化と論理』pp.533–584) 九州大学出版部
2002『インド古典文法学研究』広島大学博士論文
金倉圓照
1971『インドの自然哲学』平楽寺書店
辻直四郎
1967『ヴェーダ　アヴェスター』(世界古典文学全集　第 3 巻) 筑摩書房
中村元
1950『初期のヴェーダーンタ哲学』岩波書店
1977–78「ヴァイシェーシカ学派の原典—Vaiśeṣika–sūtra と Padārthadharmasaṃgraha—」『三康文化研究所年報』第 10・11 号，pp.1–156.
李宰炯
forthcoming「バルトリハリの〈時間〉論—〈時間〉表現の分析と考察」『南アジア古典学』第 2 号

（イ　ジェヒョン，　広島大学大学院
文学研究科博士課程後期［インド哲学］）